

第10回フィリピン健康研究システム学術集会においてパネルディスカッションに登壇しました（2016/8/10-11）

テーマ：健康と環境のための研究と技術開発

会場：シティステイト・アストリアス・ホテル（プエルト・プリンセサ、フィリピン）

2016年8月10-11日（水-木）にフィリピンのパラワン島にあるプエルトプリンセサで開催された第10回フィリピン健康研究システム学術集会において、江川新一教授がパネルディスカッションに2回登壇しました。

フィリピン健康研究システム（Philippine National Health Research System (PNHRS)）は、10年前からフィリピン政府科学技術省（DOST）によって組織されている健康に関する研究と技術開発を推進する機構で、毎年フィリピン各地で数日間の学術集会を開催しています。今回はパラワン島のプエルトプリンセサにおいて500名を超える保健医療の実務者・研究者とともに災害や環境の研究者の参加がありました。江川新一教授は、国際招待演者として1日目のパネルディスカッション「健康と防災研究の国家的研究計画の推進」と、2日目のパネルディスカッション「気候変動と自然災害に対処するための国際保健技術開発ハブとしてのフィリピン」に登壇し、仙台防災枠組と、とくにその健康面を実現させるためにはどのように考え、どのように研究を推進したらよいかについて発表しました。

学術集会は単なる発表の場ではなく、若手研究者に英語論文の書き方や、研究の進め方、高齢化や個人情報の保護などに関する学習の機会も提供しています。フィリピン全土からの参加者は、研究の審査委員会のレベルや学術論文の優秀さなどによってさまざまに表彰され、今後の研究に対するモチベーションとスキルを高めることができます。

フィリピン政府の科学技術省が災害科学のなかでも健康を中心にすえた研究と技術開発を推進していることは大変高く評価できます。さらに、ヘルスセクターと他のセクターとの知識の共有を推進しており、1日目のパネルディスカッションでは、DOSTのプロジェクト・ノアがフィリピン全土のハザードマップを携帯電話やタブレットで誰でもアクセスできることや、気候変動によりどのような災害が起こりうるかを想像することの重要性、企業との協調行動の重要性が示され、保健医療分野の研究者にとって大変有意義な知識の提供をしていました。またフィリピン保健省が防災において予算的にも人的資源の面でも重要な役割を果たしていることも示されました。

フィリピンは7000以上の島からなり、会場となったパラワン島の地域だけでも1700の島と100以上の民族がすむ多彩な国家です。フィリピンが経済的な成長をとげ、多彩なハザードにも関わらず研究と技術開発を推進している様子は第二次世界大戦後に日本が高度経済成長をなしとげたところとイメージが重なります。道路や上下水道施設などのインフラ整備状況や、個人の住宅、さらには栄養状態にいたるまで、地域、経済状況によって大きく異なります。経済成長や高齢化が21世紀においてどのように持続可能な状態で発展するのかは、大変興味を持たれます。

フィリピンが今後災害研究の健康面でのハブとなり、共同研究・協調行動を推進することは、わが国やIRIDeSにとってもデータ取得や資金面においての重要なパートナーになることは間違いありません。来年の学術集会はミンダナオ島にて開催されるとのことでした。



仙台防災枠組の健康面の実施と気候変動により起こったイギリスの災害について報告する Virginia Murray 教授



熱心に聴講するフィリピン各地の保健医療の研究者や災害対応者たち



1 日目のパネルディスカッションで災害と健康の研究について報告する江川新一教授



台風ハイエンの被害と復興復旧について報告するフィリピン保健省の Aileen Espina 前東ビサヤ地域医療センター院長



2 日目のプレナリーセッションでフィリピンの災害と健康について報告する江川新一教授



招待講演者と主催者

文責：江川新一（災害医学研究部門）